



Title	50 Jahre in Japan 1905-1957 : Heiliges Vermächtnis; Geschichte der Hokkaidomission der Thuringischen Franziskaner/Folda, 1957
Author(s)	浅井, 正三
Citation	基督教学, 3, 34-45
Issue Date	1968-07-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46220
Type	other
File Information	3_34-45.pdf



[Instructions for use](#)

50 JAHRE IN JAPAN 1905-1957

HEILIGES VERMÄCHTNIS; GESCHICHTE DER HOKKAIDOMISSION
DER THURINGISCHEN FRANZISKANER/FOLDA, 1957

浅井正三

北海道のキリスト教伝導は、キリシタン時代にはじまる。一六一四年徳川幕府が禁教令を發布して以来日本の南部から、キリシタンが或いは追放、或いは亡命によつて東北奥羽地方及び蝦夷の南部へ移往した。之等キリシタンを中心に宣教師達の活動が繰り広げられた。長崎で集められた衣類、食料を携えて、Gerolamo de Angelis 師が津軽のキリシタンを訪問したのが一六一六年であった。爾来 Gerolamo 師、Dieg Carvalho 師他数名の宣教師が蝦夷を訪れている。一九三〇年津軽を訪れた二人の宣教師が幾度か蝦夷に渡つた事が報告されているが、それ以後キリシタン時代の宣教師の活動については、記録が残されていない。

大平の夢が黒船の渡来に破られて、下田と函館が開港した。一八五六年フランスの軍艦二隻が、函館に入港した。偶々乗組員の水兵が死亡したので、チャブレンであった司祭が上陸して埋葬を司式した。キリシタン時代以後カトリックの司祭が、北海道に足を踏み入れた記念すべき年である。禁教令は続いていたが Mermet 師が上海から函館に上

陸したのが一八五九年であった。やがて禁教令は撤廃され日本全国に本格的なキリスト教伝導が展開された。

一八九一年日本のカトリック教会には、東京大司教区と長崎、大阪、函館の三教区からなる Hierarchia が設立された。日本のミッションは、すべてパリー外国宣教会に委ねられていた。東北奥羽、北海道、千島は函館地区に属し Alexander Berlioz 師が函館司教に任命され教区長になった。北部日本全体に亘る広範な地域の伝導責任者となった Berlioz 司教は後に、北海道を独立のミッションとして、ドイツのフランスコ会 Thuringia 管内に委託した。北海道に始めてフランスコ会が到着した一九〇七年以後一九五七年まで、五十年間に亘る伝導活動を回顧して『日本における五十年』の題名の許に、フランスコ会 Thuringia 管区本部所在地中部ドイツの Fulda 市にある Frauenberg 修道院から、北海道の伝導史が発刊された。執筆者は、Gerhard Huber 師と Nagel 師で一九五七年の出版である。本書の特徴は、日本及び日本のキリスト教伝導に関する予備知識を殆んど持たない、ドイツのキリスト者、特にフランスコ会修道院関係者を対象に書かれたものであること、第二に北海道のミッションそのものというより、フランスコ会のミッションに重点が置かれていることである。それが本書の長所であり又短所ともなっている。内容は全体が四章に分けられ。

第一章 北海道の地理的状況の概略

第二章 蝦夷のキリシタン史

第三章 北海道におけるカトリック教会の復興

第四章 北海道におけるフランスコ会伝導の歴史

となっている。

第二章は Huber 師による既刊の『蝦夷切支丹史』（札幌光明社出版）の再録と云ってよい。

西歴六五八年阿部比羅夫と戦つた夷アムラが、アイヌの祖先であると推定される事から書き起され、蝦夷の開拓を始めたのが一五世紀の中頃、松前候の祖先に当る武田氏であつたとされる。松前氏は一六〇四年徳川幕府から松前藩主として公認された。住民はアイヌを主とし、少数の日本人被追放者、難船者及びアイヌとの交易者等であつた。一六〇〇年前後日本全体に七五万人のキリシタンが存在していたと推定されるが大部分は長崎と江戸付近に在住していた。しかし一六〇五年一人の熱心なキリシタンが、日本北部で約二〇〇人に洗礼を授けたことが記されている。松前で医者を探していたが選ばれた医者がキリシタンであつた。彼は松前でキリストの教えを伝えた。Huber 師はこの医師を Mathias 長庵と見なしている。一六一四年布告された家康の禁教令により京都及び大阪のキリシタン七五名とその家族が津軽に流された。彼等の津軽での窮乏を救う為 Gerolamo 師が長崎から船で津軽に赴いた事は前に記した。その頃蝦夷で金、銀の鉱山が発見され其処に働く鉱夫達の中にキリシタンが混じつていた。松前はキリシタンに対し、始めは寛大な態度をとつていたからである。Gerolamo 師は一六一六年蝦夷のキリシタンを訪問したが、之によつて彼は蝦夷の地を始めて踏む宣教師となつた。以後一六一八年、二十一年、二十四年四回蝦夷に渡り伝導に携るかたわら、蝦夷の奥地を調査し、蝦夷が、島であると結論してゐる。Gerolamo 師と相前後して蝦夷を訪問した宣教師に Diego Carvalho 師がゐる。Diego 師は一六一七年、二〇年、二三年と三度蝦夷を訪れている。彼等は長上の命令に従つて旅行したものであつて、当時の伝導上の方針として年に一度は信者の義務を果たす為、宣教師が各地のキリシタンを訪問するよう心掛けていた事が知られる。彼等はいづれも商人、鉱夫に変装し困難な旅を繰り返した事を思えば驚歎に価する。Diego 師は、一六二〇年第二回蝦夷旅行の際、北海道で始めてのミサを八月五日雪の聖母の祝日に捧げてゐる。Gerolamo 師は北部日本を巡回し約一〇〇〇人に洗礼を授けたと伝えられるが、彼と行動を共にした日本人司祭がいた。その日本人司祭は Diego Yuki 師であつたらしい。キリシタン迫害は激しさを加え、Gerolamo 師は一六二三年江戸で、Diego 師は翌年仙台で殉教した。Diego 師殉教の後蝦夷のキリシタンについて充分な報告は残されて

いないが、若干の勇敢な宣教師が津軽と蝦夷の信者を訪れたことが知られている。一六二六年津軽を訪れた或る司祭がその年は蝦夷に渡れなかったが前年に渡った事が知られている。この司祭は Diego Yuki 師であつたらしい。一六三〇年 Johannes Mathias Adami、Johannes Baptista Porro の二人の司祭が津軽に来て居り、彼等も幾度か蝦夷に渡った事が知られる。

キリシタンに対して以前は寛容な態度をとっていた松前藩にも迫害の火の手は蔽しさを加えた。そのクライマックスとも見なされるのが、一六三九年千軒岳で行なわれた一〇六名のキリシタンの殉教であつた。この出来事によって衝撃を受け、松前と付近の鉢山に居たキリシタン達は、日本人の来ない蝦夷奥地の海岸へ移住した。日高地方にその痕跡が留められている。

第三章 北海道におけるカトリック教の復興

北海道におけるカトリックの復興は日本全体のそれと歩調を一にするものであるが、Mernet 師によつて一八五九年函館に建てられた仮教会は横浜（一八六二年）、長崎（一八六五年）に先立つ光榮を荷っている。更に朔ること三年、一八五六年フランスの軍艦シベール号とコンスタンチン号が、函館に入港し Furet 師と Mounicon 師がチャブレンとして乗組んでいた。偶々亡くなった水兵の埋葬の為上陸したが、之が開国後始めて司祭が北海道の土を踏む機会となつた。日本人に対する禁教令は当時尚存在していたので、Mernet 師が仮教会を建てた時、日本人に対して伝導する事は許されていなかった。Mernet 師は法律で許される限り伝導に従事するかたわら、英仏辞典、アイヌ語辞典の編纂に手を染める一方、フランス語学校を開き医学の心得もあつたので無料で病人の治療に當つた。時まさに幕末の混乱、五陵廊の戦いなど騒乱の時期に當つていたので、事思うに任せなかつた。加えて僧侶の妨害、ロシア正教会の進出等の事があつて Mernet 師の活動は困難に陥り遂に中断の止むなきに至つた。Mernet 師は函館を去り再び帰ることはなかつた。

一八六七年（明治元年）北海道の開拓が組織化され、翌一八七〇年札幌に開拓使の役所が置かれた。それにつれミッションも函館から札幌に活動の中心を移す事になった。一八八一年仮の伝導所が札幌に設けられた。札幌の最初の伝導師は植物学者として有名な Faun 師である。師の管轄区域は、函館とその周辺を除いた北海道全体に亘る広範な地域に及んでいたので一個所に永く留まる事は許されなかった。

一八九一年日本のカトリック教会は東京大司教区、長崎、大阪、函館の三教区からなる Hierarchy が設立された。函館教区長には、バリー外国宣教会の Alexander Berlioz 司教が任命された。Berlioz 司教は北海道ミッションの組織化に努め、札幌に二人の宣教師を定住させ、近郊の北広島に巡回教会を置いた。

一八九三年室蘭に教会が設けられた。室蘭教会はアイヌ伝導をも目指して設置されたもので、Berlioz 司教はアイヌ布教に大きな関心を持ち、アイヌ語の公教要理を作った程である。

北海道開拓に特色ある貢献をもたらした、トラピスト修道院が建てられたのも、アイヌの改心を意図して Berlioz 司教が招いたのである。司教は一〇〇〇エーカーの土地を買った。其処にトラピスト修道院を建て、その周囲にアイヌを住ませ、修道士達の指導の許に農業、牧畜を営ませ除々にキリスト教化する構想をたてた。一八九六年十月フランスに母院を持つトラピスト修道士の最初のグループが、中国のトラピスト修道院から来日し、渡島当別に「灯台の聖母修道院」を建てた。Berlioz 司教の招きに応じ修道院の周囲に集ったアイヌは相当数あったが、彼等は畑仕事は、「女仕事」と見なしてそれに打込む気持になれなかった。数年後に彼等は皆生来の漁業や狩猟の生活に戻り、修道院の付近から姿を消した。しかしトラピスト修道院はその後も発展し、後に湯の川に女子トラピスト修道院が建てられ、前者を凌ぐ発展を見せている。

札幌からの巡回教会であった小樽に一九〇三年から司祭が定住するようになり、翌年旭川にも司祭が定住する教会が建てられた。

フランススコ会宣教師が来道するまで、北海道の伝導はささやかな活動しか行ない得なかった。宣教師が不足し教会の建設は進まなかった。

第四章 北海道におけるフランススコ会伝導の歴史

日露戦争終結後（一九〇四～一九〇五年）日本の政治的地位の躍進につれ、キリスト教伝導も躍進するかに期待された。当時日本のカトリック信者は約六〇〇〇名に達していた。教会行政上四つの教区に分けられていたが、すべてフランスのバリー外国宣教会に委ねられていた。宣教師の数は僅かであり北部日本には特に働き手が欠けていた。Berlioz 司教は一九〇五年のローマ訪問の際、広範な地域に亘る教区を援助する宣教会を探していた。そこで同司教は、マリアの宣教師フランススコ女子修道女会の本部を訪問し、北海道で事業を始めて欲しいと要請した。既に熊本 の琵琶崎で癩病人の為の施設を開いていた同会の総長は、Berlioz 司教の希望を受入れた。修道女達の招へいに伴って来道する宣教師を探す必要があった。司教はフランススコ会総長 Dionisius Schuler 師に事業計画を話した。総長は三人の司祭派遣に同意した。札幌には Fauri 師の後を継いで Lafon 師が働いていたが、一九〇八年修道女達の住居を建てこの年八月七名の修道女が来日した。彼女等は後に天使病院を設立するのである。

〔フランススコ会宣教師の札幌到着〕

フランススコ会の総長は、三人の司祭派遣の意向をかねて示していたが、Berlioz 司教は彼等が修道女達の為に聖務をとり行なう丈でなく、外国語の教授をすることも計画していた。従って三人は夫々国籍の違う人が選ばれた。うち二人が一九〇七年一月十九日札幌に到着した。フランススコ会のドイツ Thuringia 管区所属の Wenzeslaus Kinold 師とフランスのバリー管区 Maurice Bertin 師であった。Kinold 師は以前にドイツ領東アフリカのミッションに任命されており、スワヘリ語を学習し始めていたが、日本のミッションへと変更された。フランススコ会入会の時期が Bertin 師より先であったので新しいミッションの頭に任命された。二人は一時北一条教会に身を寄せたが、そこには

主任司祭 Lafon 師、助任司祭 Billet 師が居た。同年六月カナダのモントリオール管区から三人目の司祭 Petrus Gauthier 師と Gabriel 修士が来札合流した。札幌市は当時北へ向って發展する事が予測されたので、市の北部に三〇〇坪の土地を購入し、修道院が建てられた。一九〇八年九月市の北部の司牧がフランススコ会に委託され Kinold 師が正式にフランススコ会ミッションの首長に任命された。札幌に北一条教会に次いで、第二の教会が設立された。当時は北十五条にあった。新しいフランススコ会が発足した当時は、國際的な性格を持つていたが、その形態を續けてゆく事は、資金面、及び人員派遣の責任所在が明確でなく、ミッションの發展に障礙をもたらした。そこで一九一一年ミッションはドイツの Thuringia 管区（フルダ管区）の所屬とされ、所管の責任主体が一本化された。

マリアのフランススコ宣教会の修道女達は熟慮の末一九一四年二十五のベットを持つ病院を開院した。之が天使病院である。

同年俱知安と白老に仮教会が始められた。白老はアイヌ伝導の為に Berlioz 司教が以前から心掛けていた線に沿つたものである。

〔札幌ミッション独立して知牧区 (Praefectura Apostolica) に昇格〕

一九一四年 Berlioz 司教は北海道のミッションを独立のミッションとして、フランススコ会に委託したい意向をドイツのフルダ管区長に洩らしていた。始めは北海道全体を任せる計画であつたが、種々の事情により函館近辺（渡島支庁）を除く事にした。第一次世界大戦が勃発し、フランス人宣教師は兵役に服する為帰国する者もあつて札幌、小樽、旭川から引揚げドイツ人宣教師と交替した。室蘭は以前から交替していたので函館以外は事実上ドイツフランススコ会のミッションとなつた。一九一五年二月十二日ローマの布教聖省から許可が与えられフランススコ会ミッションは名実共に独立し、四月十三日付で札幌教区（知牧区）が誕生し、Kinold 師が教区長に就任した。札幌教区の管轄は渡島支庁を除く北海道全域、樺太の南半分、千島列島を含み、信徒数は九三〇名宣教師は一〇名であつた。

一九一五年白秋老教会閉鎖に伴い、宣教師が一人札幌に戻ったのを機会に、週刊誌『光明』が発刊される事になった。光明発刊の動機は宣教師の数が少なく、信者、研究者を訪問するいとまが無かったので信仰の糧を与える為の一助として考え出された。乏しい教区財政には負担であったが、この種の週刊誌が皆無であった当時の日本伝導に、先鞭をつけたものと云える。当初の発行部数は九五〇部であった。

〔北一条教会新築〕

札幌の北一条教会は一八八一年に始められ、現在の司祭館の建物が一八九八年に建てられ二階を聖堂に使っていた。現在の本聖堂が落成したのは一九一六年十月八日であった。

〔北十一条教会〕

北十五条のフランシスコ修道院が、手狭であったので一九二〇年北十一条に教区長館が建てられその隣接地に二年後に北十一条教会が建設された。

〔藤高等女学校開校〕

ドイツのThüneに母院を持つ殉教者聖ゲオルグのフランシスコ会の修道女が一九二五年四月一日藤高等女学校を開校した。

〔岩見沢幼稚園開園〕

一九二七年九月一日岩見沢に教区最初の幼稚園が始められた。

〔ヨゼフ大久保俊作師帰国〕

Kindol 教区長はかねてから邦人司祭の養成に意を用い、北十五条に小神学校を設置した程であるが、その初穂として、ドイツに留学していた大久保俊作師が札幌教区最初の邦人司祭として一九二八年二月帰国した。

〔札幌教区代牧区 Vicariatus Apostolicus 昇格〕

札幌教区は教会行政上教区としての第一段階知牧区であったが、教勢の發展に伴い一九二九年三月代牧区に昇格した。代牧区昇格に伴い、Kinold教区長は六月五日司教に聖別された。

樺太のミッション独立

同年七月十三日樺太のミッションが札幌教区から分れて独立のミッションになった。

〔山鼻教会設立〕

一九三〇年八月三日南十條西十一丁目に山鼻教会誕生。同年十月十七日帯広教会が設立された。

当時教会建設は単に資金的な困難に遭遇した乍らでなく、特に法律的な障礙があった。教会設置の許可を得る為に、一〇〇人以上の信者が要求されていた。しかし教会なしに一〇〇人以上の信者を獲得する事は不可能に近い事でありこの法律のねらいは教会建設を事実上禁止するものであった。

〔満州事変勃発〕

満州事変に伴って国粹主義、軍国主義的国民精神が昂揚され、ひいては神道の昂揚となった。この風潮は、キリスト教敵視の傾向を促しその結果外人宣教師の活動は日ましに窮屈なものになっていった。こうした空気にも拘わらず一九三二年留萌教会が旭川教会の巡回伝導所として、江別教会が岩見沢教会の巡回教会として発足した。

〔光星学園発足〕

一九三二年七月ペトロ・バプスタ武宮雷吾師がドイツから帰国した。師に同伴してBleyerheideの、フランススの貧しい兄弟会”の三人の修道士が、札幌に男子中学校設立の目的で来日した。種々の事情で計画は変更され、光星商業学校として一九三四年開校した。初代校長は武宮雷吾師であった。

〔円山教会設立〕

札幌の西部北四條西二十三丁目一九三七年十二月円山教会が設立された。

〔第二次大戦直前〕

一九三六年に起つた二・二六事件を契機に政治は益々軍国主義への傾斜を強め、キリスト教に反対の風潮も悪化の度を加えた。同年十二月土井辰夫師が東京大司教に任命され、日本のカトリック教会の指導者が邦人に移行する第一歩がはじまった。一九四〇年宗教団体が施行され国家の統制が教会の上に重くのしかかってきた。一九四〇年十月 Kinold 司教は札幌教区長の職を辞任し、後任に麻布教会主任ロレンシオ戸田帯刀師が任命され、一九四一年二月着任した。

〔第二次世界大戦〕

宣教師達はほとんど活動する事の出来ない暗い時代であったが、教会施設は何一つ被爆しなかつた事がせめてもの幸いであつた。一九四四年戸田教区長は横浜教区長に転任し、後任として、アウグスチノ瀬野勇師が東京から着任した。

〔第二次大戦後〕

大戦後自由を得た教会の特長は、宣教師の著るしい増加であつた。殊に中国の共産化に伴つて、従来中国の伝導に當つていた修道会及び宣教師達が、日本のミッションに合流した。札幌教区もその恩恵を受け、イタリヤ系及びオランダ系のフランシスコ会宣教師達は、一九五〇年六名、五二年三名、五三年三名が来道した。

〔Kinold 司教帰天〕

Kinold 司教は教区長辞任後天使病院のチャプレンとなつていたが、高齢と持病が重つて一九五二年五月二十二日八十年の生涯を閉じた。一九〇七年来日して以来四十五年間を、北海道の伝導に捧げ札幌教区の土台を築き上げた。

〔札幌司教区 (Diocesis) 設立〕

Kinold 司教の帰天は、北海道ミッションの一時代の終りを意味し、同時に新しい時代の黎明を告げるものであつた。

た。一九五二年十二月十一日札幌代牧区が、司教区に昇格した。京都教区出身のベネディクト富沢孝彦師が初代札幌司教に任命され、翌年三年十九日北一条教会で司教に聖別された。この機会に渡島支庁も札幌教区所属となり北海道全域が、札幌教区長の管轄下におかれた。

富沢司教は札幌教区を六地区に分け、夫々の分担を次のように定めた。

札幌地区 〓 石狩、後志―邦人司祭

函館地区 〓 渡島、檜山―バリー外国宣教会

苫小牧地区 〓 胆振、日高、空知南部―メリノール会（アメリカ）

旭川地区 〓 上川、留萌、宗谷、空知北部―フランシスコ会（フルダ管区）

釧路地区 〓 十勝、釧路、根室―フランシスコ会（ベニス管区）

北見地区 〓 網走―フランシスコ会（オランダ管区）

フランシスコ会ミッシヨン金祝

キリシタン時代の先輩の偉業を継ぎ、フランシスコ会宣教師が日本伝導を再開した一九〇七年以来、五十年の歳月が過ぎた。この記念すべき Jubileum は一九五七年一月十五日行なわれた。この日北一条教会で感謝の司教ミサが捧げられ、高らかにテ・デウムが歌われた。翌十六日 Knold 司教をはじめ、北海道の伝導に一生を捧げた宣教師達の追悼ミサが行なわれた。

本書はドイツ、Thuringia 管区のフランシスコ会修道会の布教を中心に書かれたものであって、焦点がそこに合わされている為、北海道全体の布教史として見れば物足りない点がないでもない。例えば旭川の教会設立当時の模様が明確ではないし、函館白百合学園、湯の川トラビステン女子修道院等について殆んど記されていない。にも拘わらず、

全体として平易な文体で興味ある叙述は、北海道のカトリック教会の歩みを知る上に貴重な文献と云えよう。

本書が終った一九五七年以後札幌教区は更に十一年の輝やかしい発展の歴史を加えている。
現在の教区状勢は次の如くである。

教会数 〓 六五

信徒数 〓 一六、三三二名

司 祭 〓 一〇一名

学 校 〓 大学一、短期大学二、男子高校二、女子高校七、男子中学一、女子中学七、小学校一
病院一、社会福祉事業七、出版一

(一九六七年六月現在)